

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02282

研究課題名(和文)新資料川端康成「生徒の肩に柩をのせて」の関係資料収集と翻刻整理を目的とした研究

研究課題名(英文)A study aimed at collecting related materials and organize materials of Kawabata Yasunari's new materials" Students carry the teacher's coffin".

研究代表者

宮崎 尚子 (Miyazaki, Naoko)

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：30611652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：川端康成が中学生時代に書いた作文「生徒の肩に柩をのせて」の背景を明らかにした。その結果、小説「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」との比較研究が可能になり、事実の検証ができた。同時に「十六歳の日記」へのアプローチも可能になった。資料整理として校長日記は全て撮影、一部翻刻して印刷製本して同窓会に寄贈した。書簡は撮影翻刻して一部活用した(個人情報に関わるので書簡全部の開示は控えた)。川端の中学時代に受けた国語教育が担当者を含めて明らかになり、生徒日誌指導やプール設営を含めて「生徒の肩に柩をのせて」成立に関わっていることを指摘した。また数回に渡り作品化や文章化している点から関心が高い出来事だと分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発見された川端康成「生徒の肩に柩をのせて」は、中学生の時に雑誌掲載された作文である。恩師の葬儀を生徒達で執り行った経緯が題材である。この頃の川端はノーベル賞を夢見ていたにも関わらず、作文の成績は五十三点とほぼ最下位であった。一方で茨木中学校の生徒日誌指導で鍛えられた文章力は高く評価されながら、内容面で厳しい評価を受けていた。ところが、恩師の棺を教え子たちが自主的に運ぶ行為が心の琴線に触れる内容だったことから大抜擢され、雑誌巻頭に掲載される。この翌年の日記に作文がクラスで最高点になったと書いている。孤児根性や美のテーマから「生徒の肩に柩をのせて」は作家誕生に大きく関わる作品であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：From the related materials, I clarified the background of the essay "Students carry the teacher's coffin" in junior high school days. As a result, comparative research with the novel "The funeral of Mr. Kuraki" and "With the shoulder of the teacher's shoulder" became possible, and the fact could be verified. It became possible to approach the "16-year-old diary". All the principal diaries were photographed, partially reprinted, printed and bound, and donated to the alumni association. The letter was taken and reprinted and used in part. The Japanese language education received during the junior high school age of Kawabata was clarified including the person in charge, and it was pointed out that the student diary guidance and the pool construction were involved in the establishment of "Students carry the teacher's coffin". Moreover, it turned out that it is a work with high interest because it has been converted into works and sentences for several times.

研究分野：日本近代文学

キーワード：川端康成 生徒の肩に柩をのせて 師の棺を肩に 倉木先生の葬式 倉崎仁一郎 西田千太郎 伊原青々園 茨木中学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 川端康成には「倉木先生の葬式」(1927年)、「師の棺を肩に」(1949年)という恩師の棺を担ぐ生徒達が描かれた作品があり、これらの元となった中学生時代の作文「師の柩を肩に(後に「生徒の肩に柩をのせて」と判明)は掲載雑誌が無かったことから全集未収録の作品であった。その掲載雑誌「団楽」(1917年3月号)を研究者代表者が2012年に発見したことから三作品の比較が可能になった。舞台となった茨木中学校の資料は後身の大阪府立茨木高等学校資料室に保管されており、初代校長加藤達吉寄贈の史料(アルバム、書簡、日記)も多数あり、当該年度の関係資料を抽出して調査することが可能であった。

(2) 「生徒の肩に柩をのせて」の恩師倉崎仁一郎(1868年2月1日~1917年1月29日、父は禮助、母はイネ)は大阪府立茨木中学校の英語教師で、松江中学校出身(追悼集より)という以外の情報は無かった。加藤校長寄贈のアルバムに倉崎と少女が写っている写真を発見した(資料)。その後、松江中学校の同窓会(双松会)の協力のもと、倉崎の生家と親戚を突き止めることができた。そこから写真の少女が最年少のヒロインのモデル倉崎敏と特定できた。「倉崎恩師御遺族の惨事を耳にし泣かざるもの幾人かある」(1920年12月久敬会会報)という会報の記述から妻寿恵が亡くなったことが予想された。茨木市の本源寺には倉崎仁一郎と妻の墓が二基あるが、妻の没年は不明であった。川端の5年間の成績では作文はほぼ最下位だが、英語だけは上位を保っていた。その英語担当が上記の倉崎仁一郎である。ここから川端の中学生時代に影響を与えた人物であることが予想された。この点に関しては研究代表者が「新資料川端康成『生徒の肩に柩をのせて』の発見とその意義」(尚絅大学国語教育学会 2014年11月23日)、「川端康成の茨木中学校時代の恩師『倉崎仁一郎(松江中7期)』の真実」(2014年度近畿双松会総会講演会12月7日)、「川端康成文学の原点 松江の人『倉崎仁一郎』の影響を中心に」(川端康成と東山魁夷 巨匠が愛した美の世界 記念講演 2015年3月29日)にまとめ講演を行った。



倉崎仁一郎と四女の敏
(加藤達吉寄贈アルバム)

2. 研究の目的

(1) 平成24年に研究代表者が発見した川端康成の新資料「生徒の肩に柩をのせて」の関係資料(史料含む)の収集と翻刻を目的とした研究である。「倉崎恩師御遺族の惨事」の内容を明らかにし、その事実が川端康成の作品にどのような影響を及ぼしたのかを検証する。
(2) 川端が感銘を受けた人物倉崎仁一郎、三宅永無はともに松江の出身である。加えて後に小泉八雲の手帳を私蔵していたということから松江の風土と、川端作品の共通点を考察したい。
(3) 肉親を続けざまに亡くした川端が、親のように慕っていた倉崎仁一郎の人柄を明らかにすることで教育と川端作品との関連を整理したい。

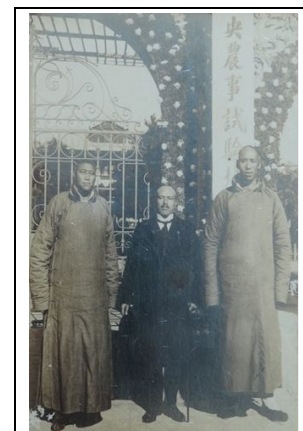
3. 研究の方法

(1) 三回作品化された題材(生徒葬儀)の実態を、追悼集・久敬会(同窓会)会報・書簡・日記・記録・新聞などを通じて詳細に調査し、どの点に川端が感動したのかを明らかにする。
(2) 川端の倉崎仁一郎に言及した記述を集めて、川端がどれほど慕っていたのかを明らかにする。川端の作文の成績は年々下がっているが、倉崎仁一郎の教えた英語だけは常に上位を保っている。国語の授業中に読書をしていた目撃談はあるが英語は熱心に取り組んでいた。文学への造詣が深い倉崎仁一郎を尊敬していた記述が見られる。
(3) 倉崎仁一郎の人物関係から、性格や行動の何が周囲を感動させていたのかを明らかにする。
(4) 葬儀の関係者の遺族に取材して、葬儀や「団楽」掲載の経緯を整理する。
(5) 茨木高等学校の伝統行事を調査して、生徒葬儀との共通点を探る。
(6) 新たな関係史料を探す。

4. 研究成果

(1) 茨木中学校の史料

初代校長加藤達吉の日記 1898年~1904年(1905年、1906年は欠本)、1907~1912年、1913~1926年、1927~1939年の40年分の当用日記と、一部の翻刻ノート(1898年1月~1905年6月)を印刷して製本(クリアファイル)し、ナンバリングして電子データとともに大阪府立高等学校同窓会久敬会に寄贈した。倉崎が亡くなった1月29日以降、倉崎の葬儀や香典についての記述が見られた。その他は静座といった健康法や庭の草木の手入れに関する加藤達吉の日常が書かれていた。



倉崎清(弟)の
加藤達吉宛絵葉書

初代校長加藤達吉の書簡 加藤達吉が伊原青々園に宛てたものや、加藤達吉宛のものを整理した。伊原青々園に宛てた書簡では倉崎家の遺族の今後に言及しているものも多く見られた。加藤宛の絵葉書では弟の倉崎清（軍人）の絵葉書（資料 ）があり交流があったことを確認できた。この弟は川端の三作品の中では「見上げるような大男」「偉丈夫」と表現されており高身長だったことが伺える。絵葉書の裏面には「五尺九寸三分」とある。両脇の中国人に関しては「七尺三寸五分」あることから清が「支那の巨人」と称している。

初代校長加藤達吉のアルバム 生徒の集合写真に加えて、個人的な関係者の写真も収められていた。その中で倉崎関係と思われる写真を抽出した。倉崎と妻寿恵と、倉崎と敏、倉崎の長女家族等の写真が確認できた。

久敬会会報 同窓会久敬会は会報を所蔵しているが全巻は無く、大正期の会報 5冊が欠本であった。うち 4冊（33,34,35,37号）を尚綱大学図書館で購入したので、複写製本して寄贈した（「久敬会報」第 71号 2017.9.1 p.21）。33号は 1918年、34号は 1919年、35号は 1920年、37号は 1922年。39号が揃えば全巻揃う。40号は 1925年なので 39号は 1923年か 1924年の可能性がある。



倉崎清（弟）家族の肖像
（於：満州）大野稔代氏より

**久敬会会報川端の記事
現物発見** 会報 48号

（1932年 12月）には川端の「師の柩を肩にした者」という寄稿があったことが分かっている（郡恵一「二つの寄稿 川端康成より茨木中学校同窓会へ」「川端文学への視界」川端文学研究会編 1987.12.25 教育出版センター）。

この記事は会報を製本した後に届いたようで、冊子ではなく両面一枚に印刷されて本体に挟んで配布された。その為、久敬会が所蔵している会報、研究代表者が個人的に購入した会報には無く、現物を確認することができなかった。郡氏の遺族によると、遺品（資料関係）は全て処分してしまったという。その後、研究代表者が再度古書店で求めて現物を発見した（宮崎尚子「川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち」「茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）」69号 2019）。これを加えると川端は少なくとも 4回は倉崎の葬儀のことに言及していることになる。

関係者の整理とその子孫 兄の倉崎金之助（1865年 8月 28日～1927年 11月 29日）と弟の倉崎清（1881年 2月 28日～1932年 5月 15日）の子孫と連絡が取れ、大野稔代氏に写真、百田富美子氏に戸籍謄本（倉崎仁一郎は 1915年に分家するまでは父の禮助、兄の金之助の籍に入っていた）等の提供を受けた。兄金之助が小泉八雲の文章を英語の教材に使用した最初の英語教師であったことが分かった（資料）。尚、この頃の金之助の住居（仁一郎の生家）は小泉八雲の当時の住居と同じ北堀町であることも判明した。金之助も松江中学校の出身であるが、若槻礼次郎と岸清一と首席を争ったと伝わる。弟の清は軍人で後に満州に渡ることになる。写真（資料）提供は金之助の子孫の大野稔代氏による。尚、同じ倉崎姓の倉崎権兵衛（楽山焼元祖）家の現当主に確認するうち、この倉崎家が分家であることも判明した。また、この分家は学問の家と言われていたことから、倉崎の文学への造詣の深さが伺える。

校歌・校章について 現大阪府立茨木高等学校の校歌も校章も、川端在学中のものと同じである。校歌作詞を手掛けた多門力蔵が『易経』『書経』を意識していたことも調査した（宮崎尚子「川端康成と『易経』 大阪府立茨木中学校の校歌と校章の由来を中心に」『尚綱語文』第五号平成 28年 3月）。校章 マークが金文体であることから、周の文王を意識した教育を目指していたことを指摘した。校歌と校章から見られる傾向は多士濟々に通じる教育理念である。一致団結して事に当たる姿勢が、後の川端の万物一如思想（「万物一如となって、天地万物は全ての境界を失って一つの精神に融和した一元の世界となる」川端康成「新進作家の新傾向解説」1925年）に影響を与えているのは間違いない。これに関して同校の校歌紹介 DVD（2019年 1月制作）に出演して解説した。また、今も同校に伝わる妙見夜行登山（生徒企画運営）は近代水泳の父と言われる杉本傳（つたえ）が始めた。生徒葬決議に立ち会った体育教師でもある。

生徒日誌指導について 川端が茨木中学校に在籍していた時期に、生徒日誌と言う指導があったことが分かった。これは地理・歴史の教員であった天坊幸彦が主導して始めたもので、毎日書いて定期的に教員が検閲するものであった。この生徒日誌が後の「故倉崎仁一郎先生追悼号」の中の「涙の生徒日誌」に採択され、川端の「生徒の肩に柩をのせて」の原型でもあった。「生徒の肩に柩をのせて」は石丸悟平（梅外）がつけた題で、他に「葬式の日、通夜の印象」という題がある。「大正 5年 1月 29日」の川端の日記に「金子薫園さんの日記文新作法をよむ少なからず啓発せらるるところがあった」という記述が見られるが、「日記文新作法」という著



倉崎金之助（兄）の記事
「山陰中央新報」1978.6.27

作は無い。下級生の大宅壮一の「大正5年4月3日」の日記には「『作歌新辞典』『日記文練習法』の二書を貸して『新世界』の三・四月号を借る」という記述があることから金子薫園「日記文練習法」であった可能性が高いことを指摘した（この他川端は、石丸梅外を林外、倉崎義郎を善郎と記述するなど書き間違いが見られる）。

仁一郎の読み方について 結論から言えばはっきりしていないが、新聞の記事ではいずれも「にいちろう」となっている（資料 ）。しかし本人の英語の署名では「J. Kurasaki」となっており「じんいちろう」と読んでいた可能性がある。一時平井彌助の養子になり、平井仁一郎を名乗っており、1888年に離縁をしている。松江の母衣小学校の職員簿には平井仁一郎の名前が確認できた。

生徒葬儀の経緯とその後について

・生徒葬儀が実現するまで

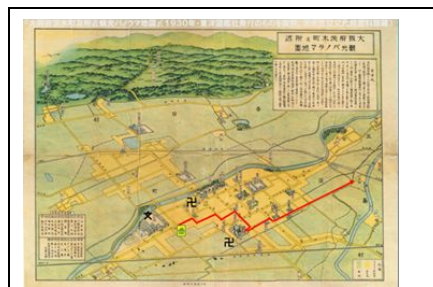
倉崎仁一郎は1917年1月29日午前4時頃脳溢血で亡くなった。同年の仁一郎の身長は「五尺四寸四分」、体重は「二十貫四百匁」との記録がある。特注された棺桶は6尺4寸であった。松江の檀家寺は桐岳寺（曹洞宗）、茨木の檀家寺は本源寺（臨済宗妙心寺派）であった。檀家寺（この時点で次男省二、三男昌一、次女貞が亡くなっている）の本源寺の本堂は600人規模の葬儀を執り行うには狭かった。東本願寺の茨木別院は久敬会関係者からの申し入れで、特別に葬儀を行うことが許された。茨木中学校5年生たちは、倉崎仁一郎に5年間教えられた生徒たち（当時は88人）だったので打ちひしがれていた。前述の杉本傳教諭が体育の時間を学年級会として提供した。その会議の中で藤波大超（1919年に茨木市千堤寺地区が隠れキリシタンの里であることを発見した。後に教誓寺住職）の発案で恩師の柩を運ぶことが満場一致で可決された。杉本傳と加藤逢吉校長は生徒の自主性を重んじて、生徒葬儀が実現するように各方面に尽力した。同年1月31日午後3時に、茨木中学校に近い倉崎仁一郎の自宅（三島郡茨木町1730）より出棺して、旗、導師、提灯、供花、喪主長男義郎（位牌）棺（生徒30名、交替30名）、三女道、四女敏、弟清、加藤校長、職員、旧知、久敬会会員からなる三町の葬列が出来た。4年生以下は別院で迎えた。総勢600人の参列者であった。中之町から立町、鍬屋町、米屋町、突抜町、別院への道程を辿る（資料 ）。兄金之助（島根県松江）と長女シヅ（岩手県釜石）が遠方の為に到着が間に合わず、2月1日の早朝に兄の金之助、姪の理喜子（1895年1月13日生）長女の長谷川シヅ、その夫の長谷川清治、弟の清、長男の義郎が別院に到着した。生徒の本田正應と藤波大超は僧侶でもあったので二人が読経した。その後、供花、棺、職員と連なり別院から突抜町、東外町、長田（火葬場）に向った。点火の後に喪主義郎から謝辞があり、生徒たちは花環から花を一輪ずつ貰って解散した（川端の作品によるとその後生徒たちは授業に参加した）。倉崎仁一郎は多くの生徒に慕われたようで教室日誌には親のように慕った恩師の死を嘆く記述が多い。

・「団樂」掲載の経緯

この生徒葬儀は久敬会の尽力と生徒たちの協力が無ければ成り立たず、言わば茨木中学校に関わる人間全員が一つになり実現した奇跡であった。またこの心の琴線に触れる内容を書いたのが川端の「生徒の肩に柩をのせて」（「団樂」1917年3月）であった。雑誌「団樂」主催の石丸梧平は茨木中学校に在籍していたことがある（1900年11月24日に疾病を理由に退学した）。その時の同窓満井成吉は茨木中学校の国語教員であり、寄宿舎の舎監でもあった。この時、川端は寄宿舎に入っていた。当初は生徒日誌の形で生徒全員が提出したようだが、その中の川端の物が満井の目に留まる。その満井の紹介で石丸に渡り、雑誌掲載となった。作文の成績が53点で、追悼号の「涙の生徒日誌」（5年生は成績上位の6名が選ばれている）に選ばれなかった川端の文章が、与謝野晶子や斎藤茂吉も載る雑誌に大抜擢されたのである。文章力は高く評価されつつも、内容が女々しく時勢に合っていないと酷評されてきた時期である。川端自身もこの時、心の琴線に触れる美をテーマにすることを獲得したのである。奇しくも1年後の日記（「大正七年二月二十一日」）には「青木先生が作文を返してくれた、八十五点ある。クラスの最高点らしい」とあるので自身の文章を確立したことが分かる。

・久敬会報の記事

久敬会は倉崎仁一郎に関する記事を会報に載せてきたが、その締めくくりが五十回忌の法要である。この時、体育教師だった杉本傳の発言で、生徒葬儀の発案者が藤波大超であったことが判明する。同じ会報（久敬会報号外 1967年4月）の香典一覧に川端康成（2,000円）の名前があることを確認出来た。これは川端が晩年まで倉崎に関心を寄せていたことを示す。更に茨木高等学校構内にある「以文会友」の文学碑（1969年10月26日）の除幕式典のあいさつで



倉崎仁一郎の葬儀の道程

は「碑文の『以文会友』これは『論語』にある言葉でありまして、『文』は文学という狭い意味ではなく、まあ、文化一般、あるいは道徳・倫理、あるいは誠の心・美しい心・優しい心 というようなものによりまして“友”と会いまして、友人をつくって、つまり人間が結ばれる。結ばれ合うというような意味で、これは非常に広い色々な意味に解釈されると思うのであります」と述べている。出典の論語は「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁」であり、「以文会友」に続く「以友輔仁(友を以て仁を輔く)」は倉崎仁一郎の柩を友たちと担いだ生徒葬儀を彷彿とさせる。晩年まで忘れ難い出来事であったことが伺える。

・川端文学への影響

川端の文学観を見ると「『文学に於ける個人の偉大さは、人生観を表示し、世界を解釈する力の大小で知れる。』と云ふのは正しい。のに、今日の新進作家は、表現を多少新しくしたが、人生を新しくしない。奇怪なことを云はねばならぬ。」(川端康成『遺産と魔』1923年)という記述がある事が分かる。その他、「インドの詩聖といはれる、ラビインドラナート・タゴールは(中略)『すべての民族は、その民族自身を世界にあらはす義務を持つてゐます。(中略)民族は彼等の中にある最上のものを提出しなければなりません。(中略)美の中に真理を、真理のなかに美を見抜く視覚を発展させて来た。』(川端康成「美の存在と発見」1923年)というタゴールの美は、そのまま美談と称された生徒葬儀に当てはまる。こういった点から川端が描こうとした美として生徒葬儀を位置付けることが出来る。また、孤児という点では「孤児なんてう名を利用してから悲しいとか何とかかとか感情をいつはつて得意がり将来文学者となつてゆかう等ととんでもない考へにとらはれてゐる脳の衰へたあはれな少年ではないか」と「大正四年ノート」に書いていることから、実は孤児への感情が強くない。それが後述する仁一郎の妻寿恵の「非業の死」の後から孤児をテーマとした作品が集中するのである。つまり倉崎の遺児である道や敏を目の当たりにして、孤児を客観的に捉えることが出来たのである。そういった意味でも倉崎家の遺児たちの行方を調査することは、川端作品考察の為にも意義深い。

(2) 松江の史料と倉崎家の遺族に関すること

妻寿恵(1876年2月6日~1920年) 松江の長谷川春水の三女として生まれる。1895年5月23日に倉崎仁一郎と結婚。長女シヅ(1895年11月21日生)、長男義郎(1898年1月26日生)、次女貞(1900年10月25日~1911年9月16日)、三女道(1902年12月13日生)、次男省二(1905年2月25日~1905年3月20日)、三男昌一(1907年10月25日~1907年12月7日)、四女敏(1909年10月2日生)を生む。絵がうまく、伊原青々園宛の書簡(早稲田大学図書館所蔵)では寿恵の署名入り絵が散見された。倉崎仁一郎が死んだ時は風邪で寝込んでおり、三女道は「父危篤」の知らせが届いた時は父ではなく母のことだと思ったという。倉崎仁一郎の伊原青々園宛の書簡からリウマチの持病があったことが分かる。結局葬儀は病氣療養中の為に参加できず、「長き黒髪を断つて棺に収められた」。出棺の際は義弟の清に連れて来て玄關まで見送りに来ている。その後1920年に亡くなっている(1920年3月23日消印の入院中の倉崎義郎から伊原青々園宛への書簡には「母も空しくなりました」とあることからそれ以前に亡くなっていたことが分かる)。義郎の入院、寿恵の死を受けての1917年12月会報の「惨事」であることを突き止めた。



長女シヅの家族の肖像 1932年・「月刊撫順」
掲載写真と同一(加藤逢吉寄贈アルバム)

長女シヅ(1895年11月21日生) 倉崎仁一郎の長女。夫の長谷川清治(1889年6月19日~1933年1月9日)は寿恵の甥。1916年に結婚して、弘と徹を生む。長谷川清治は岩手県釜石製鉄所に勤めていたが、倉崎仁一郎の死の後に撫順製油工場長として渡満した(資料)。長谷川清治はオイルシェール開発に関わり、軍部との確執から1933年1月9日にピストル自殺を遂げる。翌年には製油工場内に銅像が建てられ、その式典にはシヅと長谷川縫三郎(清治の父)の後ろ姿と思われる写真がある(加藤逢吉アルバム)。この一件は小山いと子により『オイルシェール』(中央公論社1941)として作品化される。川端は1941年に満州日日新聞社の招きでこの地を訪れており、銅像を見た可能性がある。晩年シヅは松江に戻った。肖像は川端の初恋の人、伊藤初代に面差しがよく似ている。

長男義郎(1898年1月26日生) 東京の逓信官吏練習所に在学中に父仁一郎が亡くなった。その後東京都内に入院をしたことが分かる。川端康成の1918年1月22日の日記の発信欄には「倉崎善郎」とある。その日の日記には倉崎と娘二人への言及(「兎に角先生はほんとに立派な人格だつた」「師範と小学校に行つてゐる娘さん等(中略)結婚するのに姉妹何れを選ぼう」)がある。久敬会主催の倉崎仁一郎五十回忌の法要は健康上の理由で出席を辞退している。

三女道(1902年12月13日生) 大阪女子師範学校予科に在学中に父仁一郎が亡くなった。直前まで帰省していたが父に促されて大阪に帰った直後の訃報であった。その後東京府立第三高等女学校に入学している。親族によると一時松江の伯父の家に身を寄せていたが、その後美

術学校に行き、著名な画家（川端画学校の関係者の可能性がある）と結婚して一児を授かったという。夫の仕事で渡航したが離婚して通訳の仕事をしながらい児を育てたというのがその後の行方は分からない。

四女敏（1909年10月2日生）尋常小学校在学中に父仁一郎が亡くなった。川端の「倉崎先生の葬式」（昭和2年「キング」）では父子家庭の一人子として登場し、唯一孤児の設定で描かれている。資料の少女である。両親の死後は伯父のいる松江や長姉シヅのいる満州に身を寄せていたが長じて「船場の本店に嫁いだ」という。婚家は判明しておらず、その後の行方も分からない。

松江中学校関係 倉崎仁一郎は、松江中学校の教頭で小泉八雲と交流の深かった西田千太郎（1862年11月9日～1897年3月15日）と旧知の仲である。西田が亡くなるまで、松江に帰省した折には会食を共にしていた（『西田千太郎日記』島根郷土資料刊行会、1976年6月）。そこから小泉八雲との関りについて引き続き調査する（曾孫の小泉凡氏にも協力を仰いでいる）。また、倉崎仁一郎は松江中学校の同窓会発起人でもあり、その点についても松江中学校同窓会会報の所蔵が確認されたので引き続き調査する（2014年時点での情報では火災により「資料は焼失した」ということだった。しかし2018年に起雲館で調査したところ、会報を複数確認し、「起雲館は焼失を免る」という記録も見つけた）。今後の可能性が期待できる。

以上のように多数の史料を発見し、整理したことから「生徒の肩に柩をのせて」「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」の作品世界を深く解釈する資料を揃えた。また、同時期の作品「十六歳の日記」の成立についても生徒日誌の視点や、「学校は楽園」の実態を詳細にすることが出来た。これまで手付かずだった茨木中学校の資料を提供したことで川端康成文学の研究に貢献できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

宮崎尚子、川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち、茨城大学教育学部紀要、査読無、68号、2019年、1-10

<http://hdl.handle.net/10109/13706>

宮崎尚子、石丸梧平主宰の家庭雑誌「団欒」に関する調査、尚絅学園研究紀要、査読有、49巻、2017年、1-7

https://www.jstage.jst.go.jp/article/seia/2017/49/2017_01/_pdf

宮崎尚子、川端康成と藤波大超～大阪府立中学校の生徒葬～、尚絅語文、査読無、6巻、2017年、31-38

<https://www.shokei-gakuen.ac.jp/univ/wp-content/uploads/sites/2/2017/06/5.miyazaki.pdf>

〔学会発表〕(計 4件)

宮崎尚子、新資料「生徒の肩に柩をのせて」に描かれた恩師倉崎仁一郎、川端康成学会、2018

宮崎尚子、川端康成“幻の処女作”「生徒の肩に柩をのせて」について、第15回 韓国日本基督教文学学会 国際学術発表会大会 仁川大学校（国際学会）、2017

宮崎尚子、明治大正期の大阪府立茨木中学校の教師陣 川端康成と倉崎仁一郎の例を中心に、Modern Literature and Education: Exploring New Approaches to the Study of Literature (Symposium) (国際学会)、2017

〔その他〕(計 3件)

宮崎尚子、文化探訪 川端康成とふるさと茨木、茨木市市制施行70周年記念シンポジウム 基調講演、2018

6. 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：押田 良樹

ローマ字氏名：(Oshida Yoshiki)

研究協力者氏名：石倉 昭子

ローマ字氏名：(Ishikura Akiko)

研究協力者氏名：大内 純

ローマ字氏名：(Ouchi Jun)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。